

長野遺跡群

善光寺門前町跡(3)

— (仮称) 善光寺門前町店舗併用住宅地点 —

2014年3月

長野市教育委員会

序

古来より信仰を集めてきた善光寺には、国宝の本堂や重要文化財の三門、経蔵など、境内に貴重な歴史的建造物が多く残されています。古代において一地方寺院に過ぎなかった善光寺は、中世以降の浄土信仰や女人救済思想、鎌倉幕府の保護などにより広く知れ渡るようになり、室町時代には高野山と並び東西を代表する一大霊地として発展したといわれています。現在も善光寺には年間600万人を超える参詣者が訪れ、日本全国はもとより海外からも多数の方が来訪されています。

本書に所収しております長野道跡群 善光寺門前町跡は、こうした日本を代表する寺院である善光寺の門前町として成立したもので、中世以降は北信地域の人・モノ・情報が集積する中核として発展してきました。一方で、人々が集う故に災害もまた多く、特にたびたび起こった火災の被害は甚大であったようです。

今回の発掘調査は、店舗併用住宅建設工事に伴うもので、調査範囲は比較的狭いものでありましたが、中世から近世にかけて5回もの火災の痕跡が確認され、善光寺周辺における災害史を解明するための貴重な成果となりました。また、現在の中央通りと平行するように延びる中世後半の溝跡も確認され、善光寺を基点とした町並みの変遷がまたひとつ明らかになったものと考えます。

ここに長野市の埋蔵文化財第135集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されています。速報と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、発掘調査に際して多大なご協力を賜りました北澤誠一氏に、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征治

例 言

- 1 本書は、長野市大字長野における開発事業〔(仮称)善光寺門前町店舗併用住宅建設工事〕にともない、平成25年度に発掘調査及び整理調査を実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、委託者 北澤誠一と受託者 長野市長 鷲澤正一との「埋蔵文化財発掘調査委託契約」に基づき、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査地は長野県長野市大字長野大門町79-1で、発掘調査対象としたのは50㎡である。
- 4 遺構測量は株式会社写真測図研究所に委託した。遺構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値(日本測地系2000)と、日本水準原点の標高に基づく。
- 5 本書の執筆は第Ⅲ章第3節第1項を田中が、それ以外を塚原が担当した。遺物の整理、図化、写真撮影は田中・日下・篠井・塚原が担当し、遺構図の整理、清書は柳生・篠井が担当した。
- 6 陶磁器の産地・年代については、中世瀬戸・美濃系は藤澤良祐氏、珠洲焼は吉岡康暢氏、近世肥前系は大橋康二氏、近世京・信楽系は畑中英二氏の研究に依拠した。その他は引用・参考文献によっている。
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺物注記や諸記録表題としての略記号は「NGK」としている。

目 次

序 文 ・ 例 言 ・ 目 次	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日記	3
第Ⅱ章 周辺の環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 遺構	9
第3節 遺物	14
第Ⅳ章 結 語	22
報告書抄録 ・ 奥 付	

第I章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

調査地は善光寺門前町の中核域に位置する。善光寺は現在も多くの参拝者が訪れ、調査地周辺には参拝者向けの土産物店や飲食店などが軒を連ねている。また、明治期から昭和初期に建てられた建造物が多く残され、一帯は歴史的な町並みを形成している。一方で、こうした歴史的建造物の計画的な維持と整備が課題といえる。調査地についても、明治期に建築された建物が住宅兼店舗として利用されていたが、既存建物を解体のうえ店舗併用住宅の新築を行うこととなり、平成25年4月1日に事業者より埋蔵文化財の取り扱いについて長野市教育委員会文化財埋蔵文化財センター（以下、当センター）へ照会がなされた。以後、埋蔵文化財保護を目的とした協議を重ね、店舗部分は施工深度に保護層30cmを加えた範囲までを発掘調査の対象とし、住宅部分は基礎が現況面より高くなるよう設計されたことから、工事立会により保護を図ることとした。以下、調査に至る経過を記す。

平成25年4月1日 事業者より埋蔵文化財の取り扱いについて当センターへ照会。周知の埋蔵文化財包蔵地範囲内につき、文化財保護法（以下、法）第93条第1項による届出を求める。

平成25年7月2日 既存建物解体時に埋蔵文化財の包蔵状況を確認。近世末以前の包含層を確認。

平成25年7月16日付け 事業者より法第93条第1項による届出が市教育委員会宛に提出される。

平成25年7月17日付け 市教育委員会教育長より法第93条第2項による指示（発掘調査）を事業者宛に通知。

平成25年7月30日 発掘調査の実施について事業者と協議。事業者と長野市との間で発掘調査業務委託契約を締結し、発掘調査を市教育委員会が実施することで合意。

平成25年8月1日付け 事業者より発掘調査依頼書が市教育委員会教育長宛に提出される。

平成25年8月12日付け 事業者と長野市との間で発掘調査業務委託契約を締結。

平成25年8月19日 現地における発掘調査に着手。



図1 調査地位置図 (1:100000)

第2節 調査体制

発掘調査業務委託者 北澤 誠一

発掘調査業務受託者 長野市 長野市長 鷲澤 正一（平成25年11月10日まで）

同上 加藤 久雄（平成25年11月11日より）

調査主体者 長野市教育委員会教育長 堀内 征治

総括管理者 文化財課長 青木 和明

総括責任者 埋蔵文化財センター所長 小山 敏夫

（庶務担当）係長 河口 英明

職員 大竹 千春

（調査担当）係長 飯島 哲也

主査 小林 和子

主事 塚原 秀之（調査員）

専門員 柳生 俊樹（調査員）・高田 亜紀子・平林 大樹（調査員）・

田中 暁徳（調査員）・遠藤 恵実子（調査員）・

日下 恵一（平成25年10月～）・篠井 ちひろ（平成25年10月～）

発掘作業員 岡沢 貴子・杉本 千代・諏訪 里子・増山 聡

測量業務委託 株式会社写真測図研究所

X線写真撮影 長野県立歴史館

株式会社ダイコク 今井 一男氏には、保護協議と発掘調査の円滑な実施について多大なるご配慮をいただいた。整理作業にあたっては、長野県立歴史館 白沢 勝彦氏にX線写真撮影についてご指導を賜った。調査にご協力いただいた各位に記して感謝申し上げます。



発掘調査参加者

第3節 調査日誌

2013（平成25）年

8月19日（月） 晴 調査用器材の搬入・設置。重機による表土除去作業開始。

8月20日（火） 曇後雨 重機による表土除去作業終了。発掘作業員による遺構検出作業。午後より雨天のため作業中止。

8月21日（水） 曇 発掘作業員による遺構掘削作業開始。

8月22日（木） 晴 遺構掘削継続。

8月23日（金） 雨 雨天のため作業中止。

8月26日（月） 晴後曇 遺構掘削作業終了。調査区全面清掃後、全体写真撮影。

8月27日（火） 晴一時雨 遺構測量（業務委託）。

8月28日（水） 晴 遺構図結線作業。トレンチ2を部分的に拡張、土層断面精査。

8月29日（木） 晴 3号溝状況図作成。

8月29日（金） 晴 トレンチ2セクション図作成。調査用器材の撤収。

9月24日（火） 晴 調査区の埋め戻しのため立会。

9月25日（水） 晴 事業地南側の石垣撤去工事のため立会。近世末と考えられる石積みを確認。

9月26日（木） 晴 前日確認した石積みの清掃、写真撮影。

10月7日（月） 晴 事業地北側隣地でのU字溝設置に伴い立会。

11月11日（月） 晴 住宅部分基礎工事に伴い立会。現場における作業終了。



重機掘削作業



遺構検出作業



遺構測量業務委託

第Ⅱ章 周辺の環境

第1節 地理的環境

調査地が所在する長野市大字長野は、明治22年(1889)の町制施行により成立した旧長野町が字名に継承されたもので、一帯は裾花川が形成した段丘面と、湯福川の小規模扇状地が複合した地形からなる。現在の裾花川は里島付近より蛇行しながら南へ流下し、現在の県庁西側からはほぼまっすぐに犀川へ流入しているが、長野盆地形成初期は里島付近から東側へ流下しており、湯福川などの堆積物に押し出されて次第に南へ流れを変えていったと考えられる。そのため、調査地一帯は砂や礫を基盤とする水はけのよい地質で、また日当たりのよい南向きの緩斜面でもあることから、居住域として原始古代より利用されている。

裾花川の旧流路は、後世になって用水として転用され、中沢川、北八幡川、南八幡川、古川、計湯川、宮川、漆田川などが整備された。鐘鉦川は取水口のある妻科からほぼ同じ等高線をつたって湯福川扇状地の扇端部に沿うように流路が設定されており、三輪・吉田地区まで裾花川の水を運んでいる。近世初頭の松城(後の松代城)城代であった花井吉成が本格的に整備したとされるが、『一遍上人絵伝』には善光寺南大門の手前に鐘鉦川とみられる川が描かれており、遅くとも鎌倉時代までには開削されていたようである。湯福川は現在、湯福神社から善光寺境内の北・東辺に沿って流れているが、善光寺本堂が現在地に移される宝永4年(1707)までは大勧進と寛慶寺の間を流れていたとされ、善光寺の造営とともに周辺の地形が改変されてきたことがわかる。

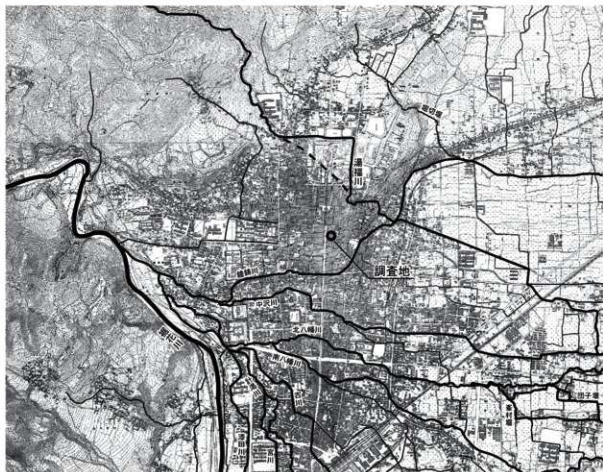


図2 調査地周辺の地形 (1:25000)

(大正15年測量・昭和27年修正地形図に加筆)



図3 周辺の既往調査と今回の調査地 (1:5000)

- ① 善光寺門前町跡 (竹風堂善光寺大門店地点)
- ② 善光寺門前町跡 (八幡屋橋五郎大門町店地点)
- ③ 元善町道跡 (大本願明照殿地点)
- ④ 元善町道跡 (仁王門東地点)
- ⑤ 元善町道跡 (善光寺仲見世通りガス管布設工事地点)
- ⑥ 元善町道跡 (釈迦堂通り地点)
- ⑦ 元善町道跡 (仁王門北地点)
- ⑧ 西町道跡
- ⑨ 東町道跡
- ⑩ 旭町道跡

第2節 歴史的環境

調査地一帯は善光寺を基点とし、現代に至るまで長野市域の核として発展してきた。善光寺の創建について「善光寺縁起」では、欽明天皇13年(552)に百済の聖明王より送られた阿弥陀三尊を推古天皇10年(602)に移し奉ったものとしているが、縁起そのものは平安時代末期に記されたものであり、現在までに創建にかかわる確実な文献史料は確認されていない。一方で、善光寺境内からは奈良県原寺や法隆寺のものと瓦頭文様が類似する古代瓦がかねてより出土し、元善町遺跡で実施された各発掘調査(③～⑦)においても着実に資料が蓄積されている。これらの古代瓦は、瓦の生産地と目される長野市若槻地籍(浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB・C・D地点)でも多く出土しており、その調査成果より遅くとも9世紀代には元善町周辺に瓦葺の建物が存在したことが明らかとなっている。近年では、元善町遺跡大本願明照殿地点(③)より「湖東式軒丸瓦」が出土し、瓦葺建物の存在を8世紀代までさかのぼらせて考えることも可能となってきた。また、善光寺門前町跡竹風堂善光寺大門店地点(①)からは鶏尾とみられる瓦片が出土しており、瓦葺建物が鶏尾を有するものであった可能性が指摘されている。なお、善光寺門前町跡竹風堂善光寺大門店地点(①)においては古墳時代後期の住居跡が検出されたほか、西町遺跡(⑧)では縄文時代中期、弥生時代中期、古墳時代前～後期、奈良・平安時代の住居跡が確認されており、瓦葺建物が造営される以前より居住に適した土地として利用されてきたことがわかる。

善光寺が中央の文献史料に初めて登場するのは10世紀中頃に成立したとされる『僧妙達藤生注記』においてであるが、このなかでは「水内郡善光寺」とされ、一地方寺院として扱われている。しかし、平安時代後期には圍城寺の末寺となり、中央において次第に認知されるようになっていったようである。この後、善光寺は治承3年(1179)に火災により全焼するが、文治3年(1187)には源頼朝により再建が命じられるなど鎌倉幕府の庇護を受け、浄土信仰の普及や善光寺特有の女人救済思想もあいまって、全国より広く信仰を集めるようになっていく。応安7年(1400)の大塔台戦を記した「大塔物語」においては、「見物の諸人は、善光寺の南大門および蒼花川の高島に履子を打つに所なし。凡そ善光寺は、三国一の霊場にして、生身弥陀の浄土、日本国の津にして、門前に市をなし、堂上花の如く」と記され、一大霊場として人々が集い、そのなかで門前町が成立・発展したことがうかがえる。調査地が所在する大門町はかつて存在したとされる南大門(二天門)にその名を由来していると考えられ、中世より善光寺門前町の中心地であった。なお、善光寺門前町跡八幡屋磯五郎大門町店地点(②)の調査では、この頃に築造されたと考えられる石積みをも有する溝がみつきり、今回の調査においてもその延長部と考えられる遺構が確認されている。

戦国時代の動乱期には、武田信玄によって善光寺本尊が甲府へ移され、その後も信濃国外で流転を繰り返したことにより、門前町も著しく衰退してしまう。しかし、慶長3年(1598)に豊臣秀吉によって本尊が戻されると、慶長6年(1601)には徳川家康より1000石の寺領が寄進され、さらに北国往還の宿場として指定されたことで、再び善光寺門前町は賑わいを取り戻していくこととなる。特に大門町は旅籠の経営を独占的に許され、有力商人が軒を連ねるようになっていく。ちなみに、本調査地の北隣には善光寺宿の本陣であった藤屋旅館があり、調査地が近世における善光寺門前町の一等地であったことを端的に示している。

こうして善光寺門前町は商業の中心地として発展を遂げたが、それ故に幾度も火災にみまわれている。調査地におけるもっとも新しい大火は、弘化4年(1847)の御領帳期間中に発生した善光寺地震に伴う火災で、門前町はほとんど全焼してしまったとされている。なお、善光寺本堂は宝永4年(1707)に火避けのため現在の地に移されており、このときの火災からは免れている。もともと本堂があった場所は堂庭として仮設の品物販売所が営まれたが、明治以降に仲見世として成立し、現在に至っている。

表1 善光寺・門前町の歴史概要

西暦	和暦	善光寺・門前町に関する事象	出典	時代
9世紀後半		瓦葺きの建物が存在（善光寺前身寺か？）		平安
1179	治承3	火災により善光寺焼失	「平家物語」「吾妻鏡」	
1187	文治3	源頼朝が信濃国目代等に善光寺再興を命ずる	「吾妻鏡」	
1191	建久2	善光寺再建落成	「吾妻鏡」	
1197	建久8	源頼朝が善光寺に参詣	「吾妻鏡」「相良家文書」	
1237	嘉禎3	善光寺五重塔落成	「吾妻鏡」	
1268	文永5	善光寺で火災	「見聞私記」	
1271	文永8	一遍上人が善光寺に参詣	「一遍上人絵巻」	
1279	弘安2	一遍上人が善光寺に二度目の参詣	「一遍上人絵巻」	
1299	正安1	善光寺五重塔再建	「鶴岡八幡宮社務職次第」	
1313	正和2	善光寺で火災	「続史愚抄」	
1370	応安3	火災により善光寺全焼	「花管三代記」	
1413	応永20	善光寺金堂を再建	「三井統燈記」	
1425	応永32	善光寺で火災との噂が京で広まる	「看聞日記」	
1427	応永34	善光寺で火災	「続史愚抄」	
1474	文明6	火災により善光寺如来堂焼失	「尋尊大僧正記」	
1558	文祿1	武田信玄が本尊を甲斐に移す	「王代記」	
1597	慶長2	豊臣秀吉が甲斐善光寺如来を京都方広寺大仏殿に移す	「甲斐善光寺文書」	
1598	慶長3	本尊が信濃に戻される	「梵長日記」	
1600	慶長5	豊臣秀頼が如来堂を再建	「慶長日記」	
1601	慶長6	徳川家康が善光寺に千石の領地を与える（大門町を含む）	「善光寺文書」	
1615	元和1	落雷により本堂（如来堂）焼失、諸堂・寺中全焼	「本光国師日記」	
1642	寛永19	仮堂が焼失	「善光寺本堂建立由来留書」	
1650	慶安3	善光寺如来堂仮堂が落成	「善光寺本堂建立由来留書」	
1666	寛文6	仮本堂（寛文如来堂）を再建	「善光寺本堂建立由来留書」	
1688	元禄1	東之門町から出火、横町等焼失	「善光寺史」	
1692	元禄5	本堂の建設を計画（再建目的の出開帳を寺社奉行より認可）	「善光寺本堂再建回國勸化記」	
1700	元禄13	火災により再建中の本堂焼失	「善光寺本堂建立由来留書」	
1705	宝永2	西之門町より出火、大本願・三寺中・東之門町等焼失	「長野史料」	
1707	宝永4	現在の善光寺本堂落成（境内は北之門町へ移転）	「善光寺本堂建立由来留書」	
1750	寛延3	現在の善光寺三門建立	「善光寺別当伝略」	
		堂庭の品物販売について、大門町から訴えあり	「長野市史考」	
1751	宝暦1	西之門町より出火、大本願・町屋一帯1500軒を焼失	「長野市史」	
1752	宝暦2	善光寺仁王門建立	「善光寺別当伝略」	
1759	宝暦9	善光寺経藏落成	「善光寺別当伝略」	
1830	天保1	宿坊と大門町が旅客の宿泊について争う	「大勳進文書」	
1847	弘化4	善光寺地震により家屋3000戸、仁王門・大本願等焼失	「弘化四年大地震御福之写」	
1849	嘉永2	東之門町が条件付で宿屋営業を許可される	「長野市史考」	
1864	元治1	善光寺仁王門再建	「善光寺取調書」	
1871	明治4	上知令により善光寺領を中野県（のち長野県）に編入		
1891	明治24	5.24 東之門町より出火、伊勢町・岩石町・元善町焼失 6.2 上西之門より出火、仁王門・大本願・院坊・元善町焼失		
1900	明治30	市制施行、長野市が成立		
1908	明治41	本堂特別保護建造物に指定		
1918	大正7	現在の善光寺仁王門再建		
1924	大正13	中央通りの拡幅事業が竣工		
1953	昭和28	善光寺本堂が国宝に指定		
1965	昭和40	善光寺三門・経藏が重要文化財に指定		
1979	昭和54	大本願、一部を焼失		
1989	平成1	善光寺本堂の昭和大修理が完了		
2007	平成19	善光寺三門の平成大修理が完了		

* 長野市の文化財第121集より引用、一部改変

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査の方法

本調査では、施工深度に保護層を加えた範囲までを発掘調査の対象とした。そのため、現状保存が可能な範囲については、遺構上部の検出にとどめたものがある。遺構の時期や性格を把握するうえで覆土を全て掘り下げて調査することが最良ではあるが、現状保存が可能である以上、こうした方法もまた選択され得るものとする。なお、調査終了後は保護砂によって埋め戻され、調査面以下は現状のまま保存されている。

2 基本層序

調査区北壁に設定した2トレンチにおいて基本層序を把握した。ここでは、層序確認のため現況面より100cm下位まで確認している。2層には、粒状の焼土ブロックと炭化物が多く含まれる。これらは、直下の3層に起因するもので、3層は材の大きさを保つ炭化材や塊状の焼土を含み、また層下面には部分的に被熱面が認められる。このことから、3層下面を火災発生時の生活面、その直上の2層は火災後の整地面と考える。こうした火災の単位は、2トレンチにおいて4単位を確認した。また、南壁に設定した1トレンチの西端部においては、さらに上位に1単位を確認することができた。本報告では、火災時の被熱面により画された時期を次のように便宜的に呼称する。15層以下：Ⅰ期、14層から11層：Ⅱ期、10層から9層：Ⅲ期、8層から4層：Ⅳ期、3層から1層：Ⅴ期、1層より上位：Ⅵ期。

これらⅠ～Ⅵ期については、上記のとおり火災を単位として時期を画したものであり、文献史料との対比を図るうえでも参考となる。このうち、Ⅵ期については、近代以降の擾乱が激しく、確認できたのは調査区南壁の西端部のみであった。また、Ⅰ～Ⅲ期についてはトレンチ部でのみ確認したもので、調査区全面ではその深さまで掘り下げていない。Ⅰ期は2トレンチの最下部に当たり、出土遺物は少量であるが、14世紀後半～15世紀前半に位置づけられよう。Ⅱ期には3号溝が構築されており、15～16世紀頃と判断される。Ⅲ期は2号溝が構築されるが、時期比定可能な遺物が出土していない。前後より、中世末から近世初頭頃に位置づけられよう。Ⅳ期は出土遺物より17～18世紀代に、Ⅴ期は18世紀末～19世紀代にそれぞれ位置づけられよう。Ⅵ期については明確な伴出遺物が得られていないが、近世末から近代初頭頃のものと思定される。

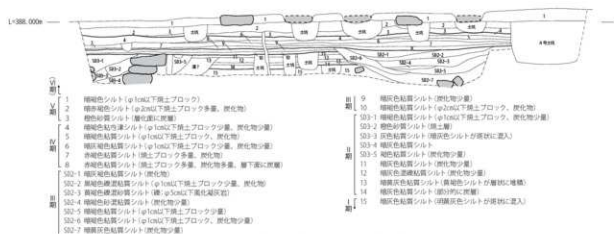


図4 調査区北壁セクション図 (1/60)

第2節 遺構

本調査では、調査区全面での遺構検出は近世までにとどめ、中世遺構についてはトレンチ部においてのみ確認した。結果、近世では礎石状遺構（礎石および礎石を据えるための土坑）、井戸、廃棄を目的としたと考えられる方形竪穴、土坑などを確認した。中世遺構については、極めて部分的ではあるが、溝2条を確認した。

1 中世

2号溝は2トレンチで断面が確認されたもので、Ⅱ期からⅢ期の間に構築され埋没したものである。東側の立ち上がりは確認できなかったが、推定幅3m以上、深さ60cm内外となる。図示しうる出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。覆土は7層に分層され、このうちSD2-3層は拳大以下の円礫が主体となる。南北方向に延びるものと推測されるが、調査区南壁では確認できなかった。3号溝は2トレンチ西端で確認されたもので、東側立ち上がりに沿って石積みがある。西側は調査区外となり溝の規模は不明である。石積み部より15世紀後半から16世紀末頃の中国製磁器と北宋銭である元豊通寶が出土したほか、覆土中より図示しえない土器皿が数片出土している。土層観察よりⅠ期からⅡ期の間に構築され埋没したものである。石積みの様子から南北方向に延びることが明らかで、現在の中央通りとはほぼ平行するようである。本調査地より約30m北の八幡屋磯五郎大門町店地点では、同様に南北方向に延びる石積み溝（SD1）が確認されており、中世後半に埋没したものとされている。時間的に矛盾がなく、中央通りからほぼ等距離にあることから、3号溝と同一のものと考えられる。

2 近世

礎石状遺構

礎石状遺構は次のような特徴により認識した。まず、25・29・34号土坑に礎石が残されており、いずれも礎石の下に根固めのための小礫が敷かれていた。そのため、礎石が失われた土坑であっても、小礫が土坑中心部にかたまって検出されたものについては礎石状遺構として認識した。また、調査区壁際で検出された29・34号土坑では、建物の重量により礎石がのる土層が沈降している様子が観察された。結果、平面的な検出では土坑外周部に同心円状の土質変化が観察されることがわかったため、このような特徴をもつ土坑についても礎石状遺構として認識した。以上より、23～30・34号土坑を礎石状遺構として扱っている。このうち組み合わせが把握されるのは、23～26号土坑、27・28号土坑、29・30号土坑である。さらに、26号土坑と27号土坑は覆土が共通することから、23～28号土坑までが同一の建物に伴う可能性がある。仮に23～28号土坑までを建物a、29・30号土坑を建物bに伴うものとした場合、建物aはⅢ期からⅣ期の間、建物bはⅣ期以降に位置づけることができる。なお、34号土坑もⅢ期からⅣ期の間に構築されているが、他の礎石状遺構との組み合わせは不明である。

井戸

1号井戸は径約1.5mの円形を呈し、内部は人頭大から拳大の礫により埋められている。礫が埋め込まれるのは掘り込み範囲よりやや小さく、隅丸方形に近い。検出時には礫とともにコンクリート片なども認められ、上部は攪乱が及んでいた。調査ではこうした攪乱部とその周辺の礫を除去することとどめたため、遺構の深さは不明である。埋め込まれた礫には規則性がなく、廃棄する際に投げ込まれたものと思われる。1号井戸と重複する2号土坑については、1号井戸構築時の掘り方と想定している。いずれも完掘しておらず、遺構の構築時期は定かではないが、廃棄されたのはⅣ期以降である。なお、調査範囲外ではあるが、事業地の南東隅に埋められずに残されていた石組みの井戸があり、立会の際にその様子を確認することができた。長らく使用されていなかったよう

であるが、現況面から3m程の高さまで水を湛えており、1号井戸の深さを推測するうえで参考となる。この石組み井戸については、工事に際して砂と礫によって埋め戻され、現状のまま保存された。

その他の遺構

1号土坑は一部が調査区外になるものの、径2.2mの円形の掘り込みをもつ。内部に礫が方形に並び、東側に飛び出し部が認められる。礫は大きさも向きも不揃いであるが、飛び出し部はやや整っているように見える。平面形態からは井戸のようにも思われるが、完掘しておらず、その性格は不明である。1号堅穴からは陶磁器・土器皿・銭貨・小刀の小柄などが出土しているが、時期は13～19世紀代までと非常に幅がある。瓦礫が投げ込まれたような状態で出土しており、廃棄を目的とした遺構と考えられる。調査区南壁の土層観察から、V期以降に構築されたものである。3号土坑は覆土が層状に分かれ、瓦が多く出土した。やはりV期以降の構築である。1号溝とした遺構は検出面から底面まで10cm内外と浅く、拳大の礫がままとっていた。石製硯が出土している。検出時は溝として認識していたが、長楕円形の土坑とみるべきかもしれない。

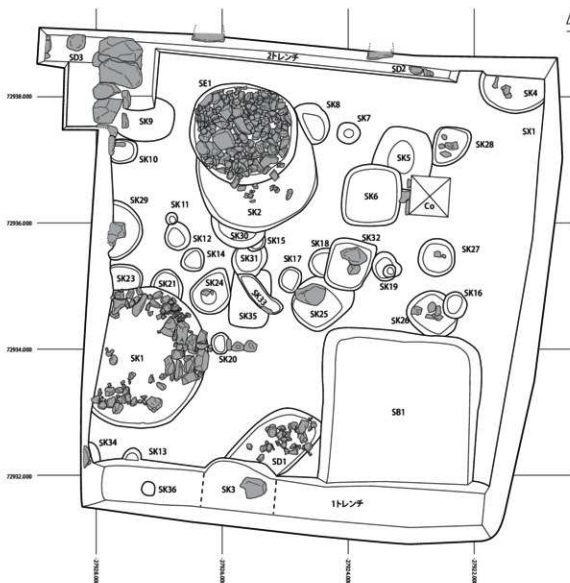


図5 遺構配置図 (1:60)



調査区全景



1号井戸・2号土坑



1号土坑



3号溝石積み



3号溝土層断面



2号溝土層断面



礎石状遺構断面 (34号土坑)



石組み井戸

表2 遺構一覧表

遺構名	想定埋没時期(期)	備考	主な出土遺物	遺物時期	遺構名	想定埋没時期(期)	備考	主な出土遺物	遺物時期
1号堀穴(S81)	近世(IV期~)	陶器土坑小	陶磁器・鉄貨・小銅	13c~13c代	17号土坑(S817)	近世			13c~14c
1号井戸(S81)	近世(IV期~)		陶磁器	17c~13c代	18号土坑(S818)	近世			
1号溝(S81)	近世(III期~IV期)		銅器・鉄貨	17c代	19号土坑(S819)	近世			
2号溝(S82)	中世(Ⅰ~Ⅱ期)				20号土坑(S820)	近世			
3号溝(S83)	中世(Ⅰ~Ⅱ期)				21号土坑(S821)	近世(III期~)			13c~14c
1号土坑(S84)	近世(IV期~)				22号土坑(S822)	近世(III期~)			
2号土坑(S82)	近世(IV期~)	1号井戸軸方小			23号土坑(S823)	近世(III期~IV期)		礎石状遺構	
3号土坑(S83)	近世(IV期~)		土器蓋	13c~14c	24号土坑(S824)	近世(III期~IV期)		礎石状遺構	
4号土坑(S84)	近世(IV期~)				25号土坑(S825)	近世(III期~IV期)		礎石状遺構	
5号土坑(S85)	近世				26号土坑(S826)	近世(III期~IV期)		礎石状遺構	
6号土坑(S86)	近世(III期~)				27号土坑(S827)	近世(III期~IV期)		礎石状遺構	
7号土坑(S87)	近世				28号土坑(S828)	近世(III期~IV期)		礎石状遺構	10c代
8号土坑(S88)	近世(III期~)				29号土坑(S829)	近世(IV期~)		礎石状遺構	10c代
9号土坑(S89)	中世(Ⅰ~Ⅱ期)		土器蓋	13c~14c	30号土坑(S830)	近世(IV期~)		礎石状遺構	
10号土坑(S810)	近世(Ⅰ~Ⅱ期)				31号土坑(S831)	近世			
11号土坑(S811)	近世				32号土坑(S832)	近世			
12号土坑(S812)	近世			17c代	33号土坑(S833)	中世~近世?			13c~14c
13号土坑(S813)	近世				34号土坑(S834)	近世(III期~IV期)		礎石状遺構	
14号土坑(S814)	近世				35号土坑(S835)	近世			
15号土坑(S815)	近世(IV期~)				36号土坑(S836)	中世			
16号土坑(S816)	近世				1号不明遺構(S80)	近世			

第3節 遺物

1 土器・陶磁器・瓦

出土した土器・陶磁器の概要

本調査における遺構の出土遺物は主に15～16世紀代、16世紀末～17世紀代、19世紀代の3時期に分けられる。その他13～14世紀や近世の遺物を若干含む。検出面出土遺物には19世紀代の瀬戸・美濃系染付が多くあり、加えて遺跡の各時期の遺物が含まれている。ちなみに今回出土した土器皿の中に底部調整が糸切であるが、体部に非ロクロ調整が施されているものが2点存在した。このような土器皿を今までの編年の中でどこに位置づけるべきなのか、今後の課題である。

土器皿について周辺の調査成果によれば、13世紀代の手づくね成形土器皿から、15世紀以降のロクロ成形土器皿へ変化することは、北信地域の土器皿の編年と同様である。しかし、16世紀末から17世紀の北信地域の土器皿については不明点が多い。善光寺周辺に関しても、貿易陶磁や瀬戸・美濃窯・珠洲窯という広域流通品との共伴関係が把握できないものも多く、15世紀以降の様相について遺物の共伴関係から編年を組むことが難しい状況にある。今後は善光寺周辺だけでなく、北信地域全体を視野に入れて詳細に検討していく必要があるだろう。

1号竪穴

土器皿については、5は手づくねであるため13世紀代と考えられる。7・8は器形が直線的に開く特徴が15～16世紀代のものである。6は底部調整が糸切であるが、体部下半に手持ちヘラケズリの調整が施されており所属時期が不明である。この他未掲載遺物も含め、19世紀代の肥前系、瀬戸・美濃系が多く、若干の京・信楽系が見られる。

土坑

1号土坑では掲載遺物はないが、肥前系染付輪花皿が出土した。型打成形で17世紀代のもつと見られる。3号土坑の遺物はロクロ成形でやや内湾気味に立ち上がる器形の土器皿（9）である。また近世以降の瓦が多く出土した。4号土坑で掲載遺物はないが、ロクロ成形の土器皿の小片が出土した。9号土坑は土器皿が出土した。12号土坑からは17世紀後半の肥前系陶器甕（11）、未掲載であるが大窯4段階～登窯1段階と思われる瀬戸・美濃系播鉢が出土した。17号土坑ではロクロ成形の土器皿が出土したが、小片のため詳細は不明である。21号土坑は未掲載だがロクロ成形土器皿が出土した。体部が直線的に立ち上がる器形である。23号土坑からは内耳鍋小片、28号土坑から近世以降と見られる鉄軸施軸の陶器片が出土した。29号土坑出土の染付（12）は中国系で明末～清代の中国南部のものと考えられる。このほか瓦質の鉢かと思われる破片が出土した。33号土坑は珠洲焼片口鉢の口縁部片が出土し、吉岡編年Ⅱ・Ⅲ期（13～14世紀代）に属する。土坑から出土した土器皿はいずれもロクロ成形であり、器形の特徴によれば、15～16世紀代に分類される。

1号溝

中国系染付（13）は小片のため器種など詳細は不明だが、16世紀末～17世紀代のもつとみられる。その他の遺物は小片で、近世陶磁器である。産地は瀬戸・美濃系、京・信楽系である。

2号溝

遺物は陶器小片が出土したが、器種・産地等詳細は不明である。

3号溝

遺物は小片のみであるが、ロクロ成形の土器皿が出土している。底部片で詳細は不明だが、直線的に立ち上がる器形と内湾して立上る器形の2種類に区分され、15～16世紀代に属する。中国系染付（14）は小片のため器種

など詳細は不明だが、16世紀末～17世紀代のものとみられる。

1号井戸

肥前系染付皿(15)が出土した。口径30cmの大皿で17世紀中～後半の製品と考えられる。16も肥前系で陶器碗である。いわゆる呉器手と称される器形で高台断面がアーチ状となる傾頭心という形状である。1650～1690年ころの製品の特徴を示す。このほか肥前系陶器で17世紀末～19世紀半ばの鉢などが出土した

1号不明遺構

口径が37cmにもなる土器鉢(17)が出土した。口縁部や内面にススの付着が見られ、火鉢の可能性はある。

1トレンチ

肥前系は大橋Ⅳ～Ⅴ期、瀬戸・美濃系は19世紀代の磁器染付、京・信楽系は小杉碗の古段階の製品が出土している。陶磁器類は全体として18世紀後半～19世紀代に収まるようである。土器皿は15～16世紀代のロクロ成形のものであるが、全体が黒色である。陶製の鳥形は型押しした後、左右を合わせて作られており接合痕が残存する。中空で後頭部に空気抜き孔が穿たれる(21)。中世後期の華南三彩の鳥形水滴を写したものであるが、時期や産地は不明である。近世以降と思われる軒平瓦(23)が出土した。

2トレンチ

天目碗(24)は古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期の製品である。土器皿はほとんどが15～16世紀のロクロ成形のもので、内湾して立ち上がる器形である。但し27は底部に糸切痕があり、ロクロ使用が想定されるが、体部下半に手持ちヘラケズリが観察される。このほか美濃焼の志野釉の筒形水注と思われる製品(29)は、17世紀末頃と推定される。また小片であるが肥前系染付皿で17世紀代の製品や瀬戸・美濃系白磁、近世陶器が出土している。

2トレンチ7層

30は中国系染付で皿と思われる。時期は17～19世紀である。

2トレンチ3層

肥前系陶器の二彩手や瀬戸・美濃系磁器が出土し、18世紀末～19世紀代に属する。

検出面

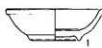
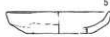
掲載した遺物はいずれも大窩期瀬戸・美濃系製品である。16世紀末～17世紀初頭に属する。この時期のものでは肥前系陶器が出土している。中世前期の遺物として手づくねの土器皿と珠洲焼Ⅲ期の甕が出土し、13世紀代である。また古代の平瓦の小片、18世紀末～19世紀代の肥前系、瀬戸・美濃系の磁器も出土した。

2 石製品・金属製品・その他

石製品では、硯、碁石、五輪塔(空風輪・地輪)、石臼、石鉢などが出土している。五輪塔地輪の側面には、「水正七〇 佛善〇 八月廿〇」と刻書されている。石臼はいずれも上臼で36などは使用によりかなり磨耗し薄くなっている。石鉢の内面にはすり潰された有機物が炭化して残されている。

金属製品では、小柄、火熨斗、煙管(雁首・吸口)、銭貨、釘などが出土している。1号堅穴より出土した小柄には花鳥文が施され、内部には小刀の茎が折れて残されている。火熨斗は半分以上が欠損しているが、柄を装着するための小孔が2箇所確認できる。銭貨では、北宋銭の「天聖元寶」「元豊通寶」が出土している。「永樂通寶」は天正～慶長年間に日本で模鑄された模鑄銭である可能性がある。このほか「寛永通寶」が6点、判読不明のものが5点出土し、うち1点は鉄銭である。煙管の雁首をつぶした雁首銭も1点出土した。これら以外に、髪飾りの一部と思われるガラス製品が3点出土している。

1号竪穴



3号土坑



9号土坑



12号土坑



29号土坑



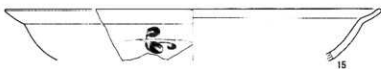
1号溝



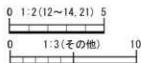
1号井戸



3号溝



1号不明遺構



1号トレンチ(1)

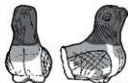
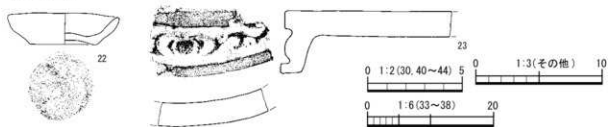
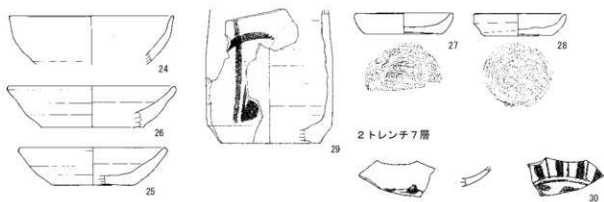


図6 出土遺物 (1)

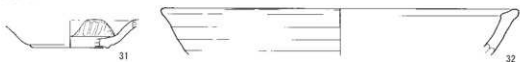
1トレンチ(2)



2トレンチ



検出面



石製品

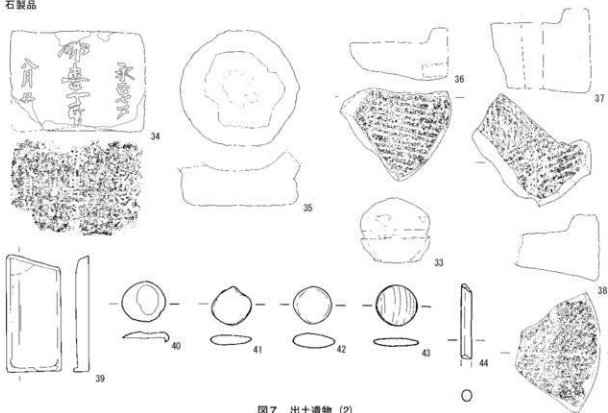
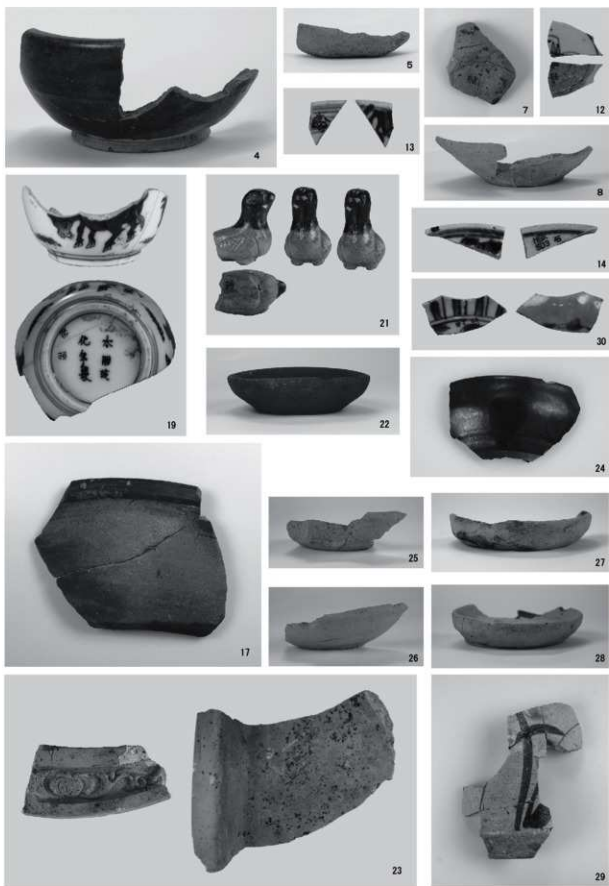


図7 出土遺物(2)



土器・陶磁器・瓦

表3 土器・陶磁器・瓦 観察表

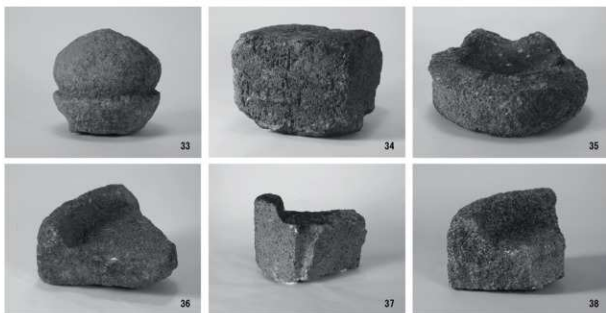
観測番号	遺構名	種類	形状	寸法 (cm)			重量 (g)	残存率	色調	胎土	成形	発定 産地	時期	備考
				口径	高さ	底径								
1	1号壺穴	磁器	蓋	7.6	2.5	3.7	31.0	1/2	灰白	精良	型成形、器付蓋貼	瀬戸・美濃	9c-10c頃	
2	1号壺穴	磁器	蓋	8.4	2.9	4.3	44.2	1/3	灰白	精良	ワタロ、鉄胎・染付	肥前	1700~1800	大塚V期、焼熱
3	1号壺穴	陶器	碗	8.2	0.99	—	19.4	口縁部1/4	灰白	精良	ワタロ、灰胎	肥前	1619~1650	大塚前期
4	1号壺穴	陶器	片口鉢	17.0	8.1	4.6	225.9	胴~底面1/3	暗緑灰 白・黒	割~底面1/3	ワタロ、白化粧、緑色釉	信代	13c	見込トナリ
5	1号壺穴	土器	蓋	7.0	1.7	4.8	15.5	1/3	にぶい 粉	白・赤・長・石	手づくね	在池	13c	
6	1号壺穴	土器	蓋	7.7	1.5	5.0	10.7	底面1/5	灰黄肌	白・赤・長・石	ワタロ、赤胎、タズリ	在池	15c~16c	
7	1号壺穴	土器	蓋	6.6	1.6	4.0	8.4	底面3/4	粉	精良	ワタロ、赤胎	在池	14c前~15c中	
8	1号壺穴	土器	蓋	10.0	2.8	4.0	36.2	1/3	浅黄肌	白、精良	ワタロ、赤胎	在池	16c	
9	3号土坑	土器	蓋	7.8	1.71	3.8	6.0	小片	にぶい 黄肌	白・黄	ワタロ、赤胎	在池	15c~16c	
10	9号土坑	土器	蓋	9.2	0.73	5.2	19.0	小片	白・赤・黄・石・長	ワタロ、赤胎	在池	15c~16c		
11	12号土坑	陶器	壺	24.0	9.40	—	113.8	口縁部 小片	暗赤灰	精良	ワタロ、沈積、鉄胎	肥前	17c前	
12	29号土坑	磁器	蓋	—	—	—	3.4	底面小片	にぶい 粉	精良	ワタロ、造外蓋貼、染付	中国	17c~13c	
13	1号溝	磁器	不明	—	—	—	8.6	口縁部 小片	白色	精良	ワタロ、染付	中国	16c末~17c	
14	3号溝(石)	磁器	不明	—	—	—	3.1	口縁部 小片	白色	精良	ワタロ、染付	中国	16c末~17c	
15	1号丹戸	磁器	蓋	30.6	14.0	—	36.2	口縁部 小片	灰白	精良	染付	肥前	1640~1700	大塚Ⅱ-2、IV期
16	1号丹戸	陶器	碗	—	0.50	4.7	96.1	底面3/4	浅黄	精良	ワタロ、蓋内面アース貼、 鉄胎	肥前	1650~1690	大塚前期、白磁半
17	1号不明溝	土器	鉢	37.0	12.4	27.0	486.8	口縁部1/4	にぶい 粉	赤・黄・長	ワタロ	在池		内丹スス、火鉢等
18	1号トレンチ	磁器	不明	—	4.00	6.2	65.1	底面完整	灰白	精良	ワタロ、高台、染付	肥前	1700~1800	大塚V期
19	1号トレンチ	磁器	不明	—	5.40	6.4	130.9	底面3/4	灰白	精良	ワタロ、染付	肥前	1700	高台内「大明成 化年製」銘
20	1号トレンチ	陶器	碗	—	(4.7)	4.0	43.9	5/6	灰白	精良	ワタロ、刷出高台、鉄胎	瀬戸・信濃	18c/4c	器中4層土、小形 鉢
21	1号トレンチ	陶器	高形 高	4.1	0.40	2.5	17.1	1/2	にぶい 黄肌	精良	割熱成形、左右を中心 で接合、緑・黄褐色で着色	不明		当館前に寄託 品小片
22	1号トレンチ	土器	蓋	8.8	2.4	5.1	89.8	完整	オランダ 紫 精良	白・黒・赤 胎	ワタロ、赤胎	在池	15c~16c	
23	1号トレンチ	瓦	軒字瓦	長 (13.3)	幅 2.9	(6.8)	382.0	1/4	灰白	白・赤・黄・ 小塵	型作	不明	近世以降	
24	2号トレンチ	陶器	天白碗	13.0	14.0	—	27.6	口縁部1/5	暗緑	精良	ワタロ、鉄胎	瀬戸・美濃	14c前~15c前	古瀬戸Ⅰ・Ⅱ 期
25	2号トレンチ	土器	蓋	11.4	2.9	6.0	38.2	1/3	粉	赤・長・黄	ワタロ、赤胎	在池	15c~16c	
26	2号トレンチ	土器	蓋	13.0	3.3	8.0	38.6	1/3	粉	白・赤・黄	ワタロ、赤胎	在池	15c~16c	
27	2号トレンチ	土器	蓋	7.6	1.6	5.8	28.4	1/2	浅黄肌	白・長	ワタロ、赤胎、口縁~底面 赤づくね	在池		
28	2号トレンチ	土器	蓋	7.5	1.6	5.2	8.6	一部欠損	浅黄肌	長・石	ワタロ、赤胎	在池	15c~16c	
29	2号トレンチ 7層	陶器	筒形水注	—	(9.4)	10.0	61.9	1/8	灰白	精良	ワタロ、刷出高台、反輪、 器部外面鉄胎、内面蓋貼	美濃	17c末	
30	2号トレンチ 7層	磁器	蓋	—	—	—	2.7	体部小片	灰白	精良	ワタロ、染付	中国	17c~19c	
31	検出面	陶器	新緑盆	—	(2.3)	6.4	15.0	底面小片	灰黄	精良	ワタロ、体部内面花雲状 土質	瀬戸・美濃	150~1610	大塚4段階
32	検出面	陶器	緑鉢	28.4	(3.7)	—	23.5	口縁部 小片	黒	精良	ワタロ、鉄胎	瀬戸・美濃	1200~1300	大塚2~3段階

(白=白色、赤=赤色、長=長石、石=石灰、黄=黄砂)

表4 石製品・ガラス製品 観察表

観測番号	遺構名	分類	素材	寸法 (cm)			重量 (g)	残存率	備考
				A	B	C			
23	検出面	5輪盆	安山岩	7.9	10.4	—	1499		空肉輪
24	検出面	5輪盆	安山岩	20.4	20.9	17.9	9650	欠陥あり	輪縁、保固7筋(永平七口 輪縁口 八月廿四)
35	検出面	石鉢	安山岩	—	8.4	16.4	2350	完整	内面磨滅・傷付面
36	検出面	石臼	安山岩	—	4.2	7.8	1900	1/10	穀物臼、上臼、挽手、使用に上り薄
27	検出面	石臼	安山岩	—	5.1	10.2	2650	1/10	穀物臼、上臼、供出口
30	検出面	石臼	安山岩	—	—	13.2	3700	1/10	穀物臼、上臼
29	1号溝	磁	貫岩	(8.2)	4.3	1.0	89.7	2/3	
2	2号トレンチ	磁	貫岩	(4.6)	(2.9)	(6.7)	8.9	—	
40	1号壺穴	基石	貫岩	長径 2.3	短径 2.1	0.3	1.7	1/2	染色
41	検出面	基石	チャート	長径 2.1	短径 2.0	0.4	2.7	完整	染色
42	検出面	基石	チャート	長径 2.1	短径 2.0	0.7	4.3	完整	染色
43	検出面	基石	緑閃岩	長径 2.2	短径 2.0	0.4	2.8	完整	白色
1	1号トレンチ	白磁	石灰岩?	0.80	0.65	—	2.4	不明	
1	1号壺穴	磁器?	ガラス	(4.7)	0.4	0.6	4.4	不明	文様あり、黄色
1	1号壺穴	磁器?	ガラス	1.7	0.9	—	6.8	完整	五角形、花文磨り込み、透明
6	6号土坑	磁器?	ガラス	0.70	0.60	—	3.0	不明	スカイブルー

石臼(A:外径、B:器高、C:中心高)、石鉢(A:口径、B:器高、C:底径)

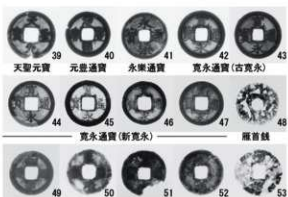
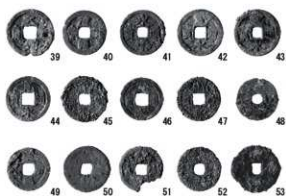


五輪塔・石鉢・石臼

表5 金属製品 観形表

観形 番号	遺構名	種類	素材	寸法 (mm)			重量 (g)	備考	観形 番号
				A	B	C			
33	焼山	瓦葺	銅	2.50	0.70	0.11	3.35	大形土製(子土鉢)10130~	33
34	3号遺石鉢	瓦葺	銅	2.30	0.60	0.12	3.24	土器遺物(重石鉢)重石鉢1079年~	34
35	焼山	瓦葺	銅	2.40	0.50	0.11	3.38	土器遺物(重石鉢)重石鉢1079年~	35
36	3号土坑	瓦葺	銅	2.40	0.60	0.16	3.74	重石鉢(古重石)	36
37	1号土坑	瓦葺	銅	2.40	0.75	0.12	3.49	重石鉢(古重石)	37
38	2号土坑	瓦葺	銅	2.40	0.70	0.08	2.81	重石鉢	38
39	1号土坑	瓦葺	銅	2.40	0.60	0.12	2.83	重石鉢	39
40	焼山	瓦葺	銅	2.40	0.60	0.12	2.84	重石鉢	40
41	焼山	瓦葺	銅	2.20	0.70	0.08	1.97	重石鉢	41
42	1号土坑	瓦葺	銅	2.10	0.53	0.10	1.90	重石鉢	42
43	焼山	瓦葺	銅	2.30	0.60	0.10	2.15	物産不詳	43
44	2号土坑(1層)	瓦葺	銅	2.50	0.60	0.16	2.58	物産不詳	44
45	焼山	瓦葺	銅	2.30	0.60	0.12	2.11	[1号土坑]	45
46	1号土坑	瓦葺	銅	2.30	0.60	0.16	2.83	物産不詳	46
47	2号土坑(2層)	瓦葺	鉄	2.50	0.60	0.27	3.45	物産不詳	47
48	焼山	瓦葺	銅	1.60	0.60	0.30	1.80	銅	48
49	2号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	49
50	2号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	50
51	焼山	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	51
52	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	52
53	2号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	53
54	焼山	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	54
55	2号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	55
56	2号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	56
57	焼山	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	57
58	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	58
59	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	59
60	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	60
61	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	61
62	焼山	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	62
63	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	63
64	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	64
65	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	65
66	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	66
67	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	67
68	3号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	68
69	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	69
70	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	70
71	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	71
72	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	72
73	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	73
74	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	74
75	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	75
76	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	76
77	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	77
78	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	78
79	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	79
80	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	80
81	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	81
82	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	82
83	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	83
84	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	84
85	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	85
86	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	86
87	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	87
88	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	88
89	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	89
90	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	90
91	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	91
92	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	92
93	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	93
94	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	94
95	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	95
96	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	96
97	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	97
98	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	98
99	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	99
100	1号土坑	瓦葺	銅	1.10	0.80	0.10	1.10	銅	100

鉄質 (A: 表径, B: 内径, C: 鉄厚), その他 (A: 長さ, B: 幅, C: 厚さ)



54(1)



54(2)



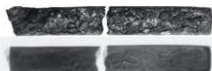
55



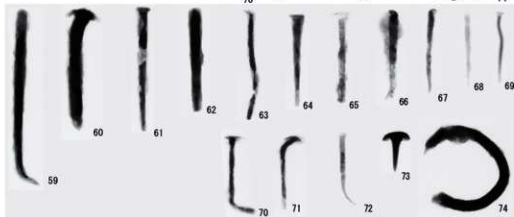
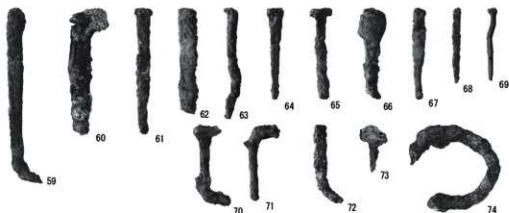
56



57



58



金属製品 (S 1/2 54(1)のみ縮尺任意)

第Ⅳ章 結 語

今回の調査面積は50㎡と狭小ではあったものの、中世から近世にかけての火災の痕跡を5面確認することができた。文献史料からも、善光寺門前町が幾度も火災にみまわれていたことは知られていたが、これまで他の調査地点では近代以降の擾乱のため重層的に確認されたことはなく、本調査で確認された土層堆積が今後の調査におけるひとつの参照枠になると思われる。なお、確認された火災の痕跡のうち、もっとも上位のものは、文献史料との対比から、弘化4年(1847)の善光寺地震に伴って発生した大火によるものと判断している。ただし、この面は本調査地においても擾乱が著しく、ごく一部での確認にとどまった。また、そのほかの面についても、出土遺物からの時代的検証は必ずしも十分ではなく、今後の調査において確認を繰り返していくことが課題である。

近世では、善光寺門前町跡の調査で初めて、建物に伴う礎石状遺構を確認することができた。調査時の所見として、確認された礎石状遺構は少なくとも2軒の建物に伴うものと考えている。うち、23号土坑から26号土坑までは、間隔がほぼ1間(約1.8m)であり、礎石状遺構の通りは現在の中央通りとほぼ直交している。建物の規模を復元するまでには至らなかったものの、近世町屋の一部と考えられる。また、確認された礎石状遺構の特徴から、建物はかなりの重量物であったことが想定される。

中世では、トレンチ部での限られた範囲ではあったが、溝2条を確認した。このうち、3号溝は東側面に石積みがあり、南北方向に延びるもので、15世紀～16世紀の間に構築され埋没したものと考えられる。調査地から30mほど北に位置する八幡屋磯五郎大門町店地点においても、同様に石積みをもつ溝(SD1)が確認されており、時期も矛盾がないことから、両者は同一遺構と考えられる。南北正軸を基準とすると、八幡屋磯五郎大門町店地点SD1と本調査地の3号溝では、3号溝の方が4mほど西側に位置しており、溝の方向が正軸より若干傾いている。この傾きが現在の中央通りとほぼ平行することが注目される。3号溝の性格については未だ不確定な部分が多いが、その規模から推測するに、町域を区画する機能があったと考えられる。そうした場合、中世後半の善光寺表参道については、現在とそその位置を大きくは変えていないものと思われる。ただし、3号溝埋没後に構築された2号溝は、3号溝と比べて東側へ4m程ずれており、時代の推移とともに町割りもまた変化したとも想定される。今後、周辺でさらなる資料の蓄積が進むことで、現在に至るまでの善光寺門前町の変遷が明らかになることが期待される。

〔引用・参考文献〕

- 愛知県史編纂委員会2007『愛知県史』別編 室業2 中世・近世 瀬戸系
江戸遺跡研究会2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
大橋康二1984『15・16世紀における日本出土の青花碗に関する編年試案(Ⅰ)』『白水』№8 白水会
九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
小林計一郎2000『善光寺史研究』信濃毎日新聞社
佐賀県立九州陶磁文化館2008『土の美 唐津・肥前陶器のすべて』
佐野美術館1999『美濃のやきもの 黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の系譜』
(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター2006『江戸時代のやきもの-生産と流通-』
宿野隆史2011『善光寺と門前の風景』『第9回考古学と中世史シンポジウム 聖絵を歩く 景観を読む 資料集』考古学と中世史研究会
全国シンポジウム実行委員会2005『中世室業の諸相-生産技術の展開と編年-』
中世土器研究会1995『概説 中世の土器・陶磁器』真岡社
中野市教育委員会1993『高梨氏館跡発掘調査報告書』
長野市教育委員会1998『長野道跡群 西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第87集
長野市教育委員会2006『善光寺門前町跡』長野市の埋蔵文化財第115集
長野市教育委員会2008『元善町遺跡・善光寺門前町跡(2)』長野市の埋蔵文化財第121集
長野市誌編さん委員会1997『長野市誌』第1巻 自然編 長野市
長野市誌編さん委員会1997『長野市誌』第8巻 旧市町村史編(旧土水内部・旧上高井部) 長野市
森村健一1995『福徳省州宮室青花・五彩・瑠璃地の編年』『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』3 (財)大阪府埋蔵文化財協会
三輪茂雄1975『石臼の謎』技術書院

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん ぜんこうじもんぜんまちあと							
書名	長野遺跡群 善光寺門前町跡 (3)							
副書名	— (仮称) 善光寺門前町店舗併用住宅地点—							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第135集							
編著者名	塚原秀之・田中暁徳							
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004 FAX 026-284-0106							
発行年月日	2014 (平成26) 年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
善光寺門前町跡	長野県長野市大字 長野大門町79-1	20201	C-018	36° 39' 25"	138° 11' 15"	20130819 ～ 20131111	50㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
善光寺門前町跡	集落跡	中世	溝	土器皿、銭貨				
		近世	礎石状遺構、井戸、土坑	陶磁器、銭貨、金属製品				
要約	<p>今回の調査では中世から近世末にかけての火災の痕跡を5面確認した。このうち、もっとも新しいものは文献史料との対比から弘化4年(1847)の善光寺地震による大火の痕跡と考えられる。近世の遺構としては、善光寺門前町跡の調査において初めて町屋の一部と考えられる礎石状遺構を確認したが、調査面積が狭小のため、建物構造や配置の復元には至っていない。中世の遺構はトレンチ部のみでの確認であったが、時期の異なる2条の溝跡が確認された。このうち、15世紀から16世紀の間に構築されたと考えられる溝は、法面に石積みを有するもので、既往調査において確認されていた溝跡と連続するものと考えられる。この溝跡は現在の中央通りとはほぼ平行しており、中世後半の表参道は現在と大きくは位置を変えていなかった可能性が考えられる。</p>							

長野市の埋蔵文化財第135集

長野遺跡群

善光寺門前町跡(3)

— (仮称) 善光寺門前町店舗併用住宅地点 —

平成26年3月18日 印刷

平成26年3月20日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 文化財課埋蔵文化財センター

印刷 信毎書籍印刷株式会社

